

## 開催にあたって

日本生命財団は昭和54年に人間性・文化性あふれる真に豊かな社会の建設に資することを願って、日本生命により設立されました。

設立以来、助成の柱のひとつとして、「人間活動と環境保全との調和に関する研究」をテーマとして、環境問題に関する研究助成を行っております。毎年実施してきた研究助成は、これまでに**28回、累計で886件、助成総額23億1,200万円**に達しています。

当財団はこれらの研究がさらに進展し、研究者間の交流や情報交換が円滑に行われることを願い、併せてこのテーマに関心をもたれる方々の意見交換の場を提供するため、「助成研究ワークショップ」を開催いたしておりますが、このワークショップも今回で第22回目を迎えることとなりました。

今回のワークショップでは「**環境資源としての森林の公益的機能の発現に向けてー森林保全のための新たな連携と合意形成ー**」を募集課題とする重点研究助成に採択された研究チームからその研究成果をご報告いただきます。

近年、森林の公益的機能を発揮させた「環境資源としての森林」が強く求められています。しかし残念ながら、このような森林はほとんど実現されておりません。その背景には大きく二つの問題が存在しております。一つは公益的機能を評価するための科学的な知見、つまり評価の「ものさし」がなく、同時に「ものさし」で計った評価得点を高めるような施業方法が明らかになっていないのです。もう一つは、この「ものさし」で計った「公益的機能の評価」に対して、誰がどのように重要性を斟酌して最終的な森林管理体系を決定するか、その主体が存在しないという問題なのです。

今回発表する研究会では北海道白老町の一般民有林などを対象として北海道が2004年に公表した「森林機能評価基準」を使って公益的機能の評価を行うとともに、それらの結果を用いて地域住民・NPO・行政機関・研究者の協働の下、森林管理体系の形成をはかることを目的とする研究を続けてきました。

まず最初に、代表研究者の北海道大学大学院の中村教授から、研究の趣旨を説明いただき、北海道水産林務部森林計画課の今泉課長から「森林機能評価基準」作成のポイントを解説いただきます。そして現在、他地域で活動されているお二人にそれぞれ「森の健康診断」（矢作川研究所 洲崎 燈子主任研究員）と「協働による森づくり」（徳島大学大学院 鎌田 磨人准教授）をご紹介いただいた後で、白老町での研究活動について3名の方からそれぞれ具体的な研究・活動内容についてご発表いただきます。

今回のワークショップの開催が「**自然環境と調和した社会の実現**」のために、私たちが今取り組むべきことをご理解いただき、これからの環境・地域・社会の再生・保全に取り組むための第一歩を踏み出すきっかけとなっていただくことを強く願っています。

**財団法人 日本生命財団 財団法人 ニッセイ緑の財団**  
**「『森林機能評価基準』を活用した地域住民・NPO・行政機関・研究者の協働による森林管理体系の形成に関する研究会」**